

Olive View Medical Center での研修について



城下彰宏

亀田総合病院 研修医 2 年目

まずは海外留学の機会を作ってくださった矢野先生、Wali 先生、Norman さん、ACP に、そして留学についていろいろとアドバイスをいただいた牧石先生、小原先生に心からお礼申し上げたいと思います。

2016/11/7-2016/12/3 の期間 UCLA 関連 Olive View 病院を見学させていただきました。

僕は米国臨床留学を志している方々と違って米国に強いあこがれがあったわけではなく、きっかけは医学部 4 年生のときに友人が受験しようとして頑張っているのを見て米国の試験に興味をわいて、そのあとはただ面白かったのでもずると ECFMG certificate をとってしまいました。

せっかくなったということ、あとは研修医 2 年目になってある程度自分の診療の型ができてきたため米国の医師と自分を比較してみたいという思いから今回留学をさせていただきました。

今回の留学で学んだことはとても大きかったのでご紹介させていただきます。僕は Internal medicine ではなく専門科しか回ってないので経験したことには偏りがあると思います。専門科だけにしたのはコンサルトをされるような複雑な症例を数多く見たかったからです。

最初の2週間は感染症内科を回っていました。移民の多さもあり、感染症の鑑別の広さは日本にはない特徴だと思います。さらに HIV の罹患率の高さが鑑別を広げざるを得ない原因の一つだと思います。日本では見たことのない疾患にあふれていて、とても新鮮な毎日でした。コンサルテーションも毎日5人ほどいて、アテンディング1人とフェロー1人で回していくのはとても大変そうでした。このくらい忙しいのは臨床力向上には良い環境だと感じました。抗菌薬の使い方や入退院に対する考え方は日本と違う点が多々あり、最初は戸惑いましたがこれらもまた考え方の違いなのだろうと思うと世界観が広がって良かったです。あとは、患者層が若いです。僕の病院は80歳代の患者はさらにいて90歳代もふつうに受診してきますが、ここの病院では50-60代が多くて、90歳の患者が来たときはカンファレンスがざわつきました。これは肥満や訴訟の問題もそうですが、米国のブラックティスをそのまま日本にもってくるのはかなり危険だと感じました。しっかりと吟味することの必要性が身にしみました。

あとの2週間はリウマチ科、呼吸器内科を回っていました。外来メインの科なので入院患者が少なく多少物足りない感じはしましたが、日本での考え方と違うところもいろいろ発見できたので楽しかったです。一番驚いたのは患者の肥満と術者の手技の習熟の問題もあってEBUSの際は全例挿管するそうです。患者の数が少ないので仕方ないのですが確かに手技はあまり上手ではなかったです。

全体としては医師のプレゼンテーションスキルが高いと思いました。プレゼンの練習にかかる時間もしっかりとって、実際の発表では堂々とわかりやすく発表しています。そしてカルテがとても見やすいです。コンパクトにわかりやすくまとめる力、これに関してはアメリカの病院のとても良いところだと思います。僕もプレゼンが苦手で、ただあまり改善する努力をしていなかったのでもっとへこみました。日本語でも彼らと同じようにプレゼンできるでは全く足りなくて、世界レベルの医師になるには英語でのプレゼンも彼らと同じようにできなくてははいけません。今後の自分の課題を見つけられたのは本当に幸せです。発表しているレジデントの姿は本当にかっこよかったです。

モーニングレポートと言って研修医が実際に経験した症例を毎朝担当を決めてケースプレゼンの形で発表する会があるのですが、僕にとってはそれがかなり勉強になりました。適度な難問で、いわゆる一生に会うことのほうが少ないまれな疾患というより、どこかで会うことが想像される疾患が答えのことが多く、また解説もわかりやすく作られていました。

僕は学生時代にバングラディッシュに留学していて、そこの大学病院では1日で100人くらいの患者をフェロー1人で診なくてはならなくて、カルテも1,2行で5分未満の診療を強いられる環境でした。アメリカは逆に1人に20-30分かけることもまれではなく、丁寧に診療を行っている印象でした。日本はその中間のような感じがします。それぞれの国に合った医療を行っていて、どこの国の医療が優れているなどは思わないのですが、それぞれの国にそれぞれの良いところがありますし、だめなところを探せばいっぱいできます。それに1つの病院見学でその国の医療を分かった気になるのも危険だと思います。なるべくポジティブに考え、良いところを探すように努力をしていました。

反省点としては日本でも僕はそうなのですが、公の場での発言に関してはちょっと積極性に欠けるころがあって、カンファレンスでの発言が極端に少ないことです。これは本当に僕のいけないところで、同時期に留学していた積極性の塊のような山本たける先生のことをとても尊敬し、僕も頑張ろうと思いました。あとは英語力です。カンファレンスの議論を聞き取れないこともありましたが、もっともって英語力を身につけて誰とでも対等に議論できるようになりたいです。

1 か月を通して、英語力は向上しましたし、感染症の知識は確実に深まりました。米国で働くとはこういうことなのだというイメージもつかめましたし、略語であふれているカルテにも慣れました。プレゼンテーション能力を鍛えるという新しい目標もできましたし、英語能力の必要性も身にしました。いつものないがしろにしていたことの必要性をたたきこんでくれました。またなによりホテルで同室だった山本たける先生との出会いは一生の宝物です。

この1 か月はかけがえのない1 か月でした。このような機会を作っていただいたことを心より感謝いたします。



左から山本先生、Norman さん、自分
冒頭の写真：Wali 先生と自分